

# 東京都市大学子育て支援センター「びっぴ」における利用者意識調査

紺野道子 野澤義隆 園田 巖 横山草介  
高橋うらら 井戸ゆかり 早坂信哉

User Attitude Survey of Tokyo City University Child-Rearing Support Center “PIPPI”

Michiko Konno Yoshitaka Nozawa Iwao Sonoda Sousuke Yokoyama  
Urara Takahashi Yukari Ido Shinya Hayasaka

## 要旨：

東京都市大学子育て支援センター「びっぴ」の利用者意識を把握することを目的としてアンケート調査を行った。質問項目は、施設の利用状況、満足度、施設を利用したことによる自身の変化、子育ての悩みについてである。

回答者の6割以上が月1回以上「びっぴ」を利用し、1回の滞在時間は1.5～4.5時間程度であった。利用に至った経緯は親族や知人からの紹介が多く、利用後に自身の友人に紹介する人も多かった。利用理由は、子どもの遊び場や親がホッとできる場としてなどが多く、来てよかった点として、子どもの刺激や楽しみになった、親自身の気持ちになったなどの回答があった。全体に満足度は高く、魅力的なおもちゃがあることや便利な施設・設備があることが利点として挙げられた。

## キーワード：

子育て支援施設 利用者意識 子育て広場

## I. はじめに

地域で親子を支える子育て支援の取り組みには、保育所の地域における子育て支援と、子育ての当事者の活動から事業化に至った「つどいの広場事業」の2つの流れがある。保育所の地域における子育て支援は、1987年の「保育所機能強化費」の予算措置から始まり、1989年の「保育所地域活動事業」創設、1993年の「保育所地域子育てモデル事業」創設、1994年には国がエンゼルプランを策定し、具体的な子育て支援の方向性を示した。その後、1995年の「地域子育て支援センター事業」への名称変更を経て、2007年に「地域子育て支援拠点事業」

に再編されるまでの20年以上、保育所は地域の子育て支援の中心的担い手として多様な取り組みを展開してきた。一方、2002年に創設された「つどいの広場事業」は、地域住民の活動から事業化に至るといった経緯を有している。親子が集う場の提供を目的として、地域のNPOなどが商店街の空き店舗や公共施設内のスペース、マンション・アパートの一室などを活用して乳幼児をもつ親が集えるひろばやサロンなどの交流の場づくりが行われた。その後、2007年に「地域子育てセンター事業」と「つどいの広場事業」は、「地域子育て支援拠点事業」として統合・再編され、2008年に法定化されている（日本保育協会、2010；安川、2014；日下・

笠原, 2016)。

厚生労働省 (2018) によれば、「つどいの広場事業」が創設された 2002 年は、地域子育て支援センター事業・つどいの広場事業合わせて 2,196 か所で実施されていた。現在の地域子育て支援拠点事業は、2017 年時点で 7,259 か所あり、親子を支える地域子育て支援の取り組みは、全国的な展開をみせている。「地域子育て支援拠点事業」では、「子育て親子の交流の場の提供と交流の促進」「子育て等に関する相談、援助の実施」「地域の子育て関連情報の提供」「子育て及び子育て支援に関する講習等の実施 (月 1 回以上)」の取り組みを実施することが定められている。

東京都市大学子育て支援センター「びっぴ」は、2004 年 6 月 1 日に日本で最初に大学設立の常設子育て支援センターとして開設され、現在 14 年目となる大学内にある地域に開いた子育て支援施設である。「びっぴ」開設以降、保育士養成を行う大学を中心に全国で同様の施設が開設されていったが、その運営は、行政が大学に委託あるいは行政と大学との協働の形で設置されているものと、大学が自主事業として設置しているものがあり、施設も大学のキャンパスにある場合と附属幼稚園等の保育機関にある場合などさまざまである (矢萩, 2013; 岸本他, 2016)。

「びっぴ」は、大学が独自の運営を行い自治体からの補助は受けていない。月曜日から土曜日の 10 時から 16 時まで (土曜日は 13 時まで) 開館し、0 歳から就学前までの子どもと保護者を対象とした遊び場であり、保育者を目指す児童学科の学生の研修の場でもある。毎日 100 名前後の親子が来館し、2018 年 5 月には利用者数が延べ 30 万人に達した。施設には非常勤の保育士が 3 名常駐しているが、親子の当たり前

の日常を大切するため、プログラム活動やイベントのような保育士からの積極的な介入は取って行わず (小川・土谷, 2007)、自然な関わりを通して親の子育てを支えている。「びっぴ」の基本理念には、①ゆっくりと、くつろげる場の環境構成をする (場所・人・もの)、②「親子の遊び場」としての利用を支える、③利用者の主体的な活動を支える、④異年齢で出会い、交流することを大切にする、⑤地域社会のネットワークづくりと再生に寄与する、という 5 つが掲げられているが、開設から 14 年たった現在も基本姿勢は変えていない。

しかし、2004 年 6 月の「びっぴ」開設当時と比べて、現在は近隣に似たような支援施設が増えてきている。「びっぴ」のある世田谷区では、「びっぴ」が開設される 2 か月前の 2004 年 4 月に区内 25 か所の児童館の「子育てひろば事業」が開始されたばかりであったが、2018 年 8 月までには、これらの児童館の他に 34 か所の施設が「子育て支援拠点事業」を実施している。「びっぴ」と似た施設である 31 か所の「おでかけひろば」は、その多くが週 5~6 日前後、1 日 5~7 時間程度開設し、おもちゃや絵本で遊んだり、親同士が子育て情報の交換をしたりできる専用のスペースがある。授乳やおむつ替えの場所もあり、子育てに関して経験豊富なスタッフが常駐し、育児相談は随時でき、定期的なイベントの実施、子育て情報の提供なども行っている。このように、地域の子育てひろばは、利用者にとって、見えやすいサービスを提供しているといえよう。

「びっぴ」でも、開設日や時間、おもちゃや遊び場・食事スペースなど場の提供、経験豊富な保育士の常駐、随時の相談などは概ね同様に実施している。この他に、見守りの姿勢、穏やかな表情や適切なタイミングでのことばかけな

ど、利用する親子が居心地良く過ごせるような細かな配慮の実践を重視しているが、先に述べた理念に基づき、定期的なイベントや講習、子どもをスタッフが遊ばせるプログラムなどのように見えやすい形でのサービスは行っていない。他の選択肢の増えた今、親子の当たり前の日常を保障するために敢えて積極的介入はせず、自然な関わりを通して子育てを支えるという「びっぴ」の支援のあり方について利用者がどう感じているのかについて確認することも必要であろう。利用者が気楽に訪れられる場であることを大切に、これまで利用者を対象とした直接的な調査研究を積極的には行ってこなかったが、2018年1月の東京都市大学総合研究所子ども家庭福祉研究センターの立ち上げを機に、初めて利用者へのアンケート調査を実施することになった。

本研究では、東京都市大学子育て支援センター「びっぴ」の利用者意識を把握することを目的とし、利用者視点での「びっぴ」の印象、利用する理由、および改善点について調査を行い、「利用者の主体性を妨げない」子育て支援センターのあり方について検討を行う。

## II. 方法

### 1. 調査期間

2018年2月26日～2018年3月25日

### 2. 調査対象

調査期間中に来館した、東京都市大学子育て支援センター「びっぴ」の利用者220名

### 3. 調査方法

調査期間中の「びっぴ」来館者にWeb入力式のアンケート調査を実施した。調査の趣旨お

よびリンク先（URLおよびQRコード）を記した用紙を配布し回答を依頼した。

### 4. 回収状況

配布数220、回答数131（回収率59.5%）、有効回答数131だった。

### 5. 質問項目

- ①基礎項目：回答者の年齢、子どもに対する続柄、子どもの年齢・性別
- ②施設利用状況：利用回数、頻度、滞在時間、施設までの所要時間、利用年数、利用に至る経緯、施設の利点欠点、利用後の自身の変化など
- ③育児の悩みに関する質問

### 6. 倫理的配慮

配布した用紙に、研究への参加は自由意思であること、回答は匿名で個人情報収集しないこと、個人が特定される形で外部に公表されることはないことなどを示し、同意される場合にPCまたはスマートフォンでアンケートに回答するように依頼した。

なお、本研究は2017年12月に東京都市大学医学研究倫理審査を申請し、2018年1月に承認を得ている（医学研究倫理審査承認番号：707号）。

## III. 結果と考察

### 1. 回答者について

回答者は母親が131名中128名だった。年齢は、30歳代が86名と一番多く、次いで40歳代が38名だった（表1）。

一緒に来館した子どもは159名で、1歳が61名と一番多く、0歳から3歳までが137名で全

表1 回答者の属性

続柄	母親	父親	祖母	祖父	その他	無回答
	128	1	0	0	0	2
年齢	10代	20代	30代	40代	50代以降	無回答
	0	6	86	38	0	1

表2 一緒に来館した子どもの年齢・性別

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	無回答
	19	61	39	18	10	4	3	5
性別	男児	女児	無回答					
	76	76	7					

体の8割以上を占めていた(表2)。男女比は同じだった。子どもを1人連れてきている人が103名、2人連れてきている人が22名、3人連れてきている人は6名だった。

利用頻度は、月に2~3回が28.2%と最も多く、次いで月1回19.8%、月1回未満18.3%だった。月1回以上の利用は64.1%で、週に1回以上利用している人も16.0%いた(図2)。

## 2. 利用状況

### (1) 利用回数と利用頻度

利用回数は、2~5回が38.9%で最も多く、次いで10回以上30.5%だった。初めての利用が16.8%、2回以上が81.7%で、リピーターの割合が多い(図1)。

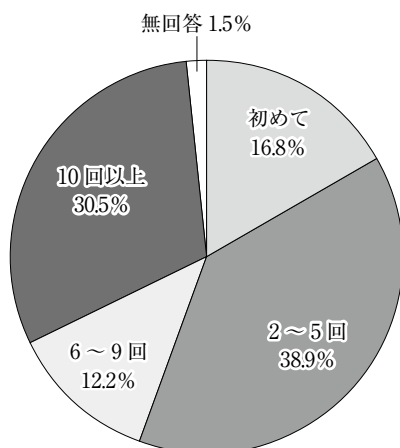


図1 利用回数

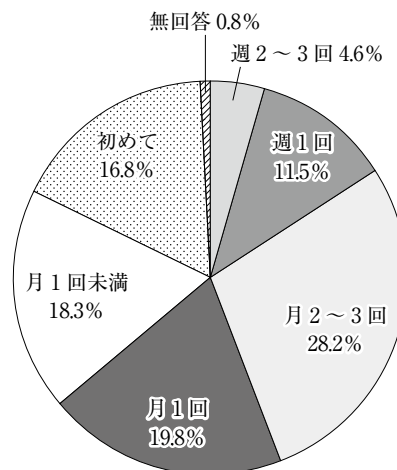


図2 利用頻度

### (2) 利用年数

利用年数は1年が38.9%、1年未満が20.6%で、2年未満の利用者が約6割を占めていたが、2年以上の利用者が約3割、そのうち5年以上も約1割いた(図3)。

利用年数が2年以下の89人のうち来館時に利用年数より低い年齢の子どもを連れていた人

が12人、利用年数が3年以上の27人のうち来館時に利用年数より低い年齢の子どもを連れていた人が23人であった。つまり、利用期間中に下の子どもが生まれた家庭も多く、利用年数が長い場合は兄弟が順々に利用しているといえよう。

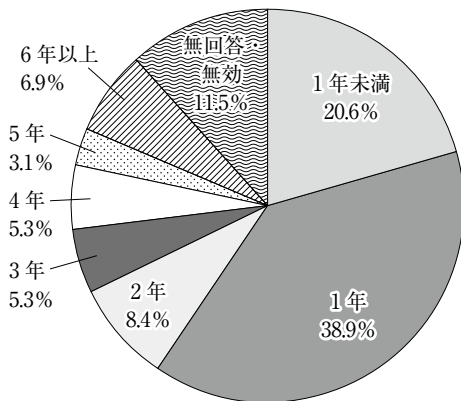


図3 利用年数

### (3) 1回の滞在時間と自宅からの所要時間

利用時の滞在時間は、1時間半から2時間半が35.1%、2時間半から3時間半が29.0%、3時間半から4時間半が21.4%だった(図4)。ある程度まとまった時間利用している人が多く、4時間半以上の利用者も3.8%いた。

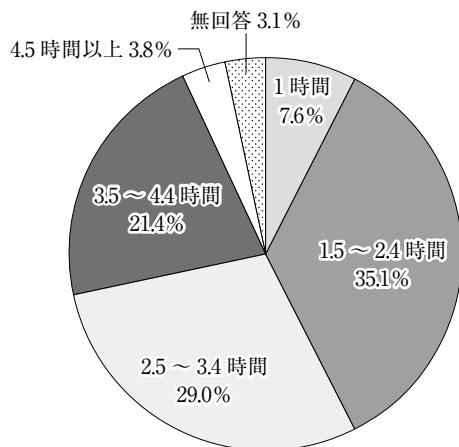


図4 1回の滞在時間

自宅からの所要時間は、20分未満が53.4%で、近隣に居住している利用者が多い(図5)。利用交通手段は、自転車、徒歩という回答が多く見られた。

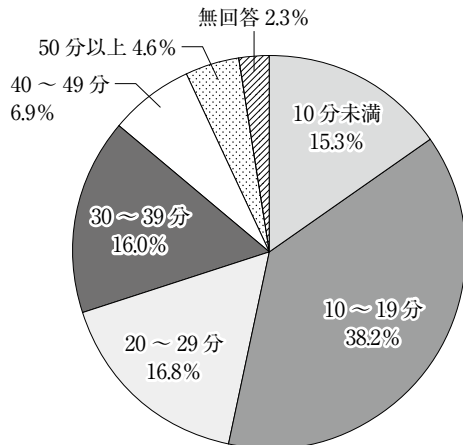


図5 自宅からの所要時間

## 3. 利用に至った経緯

### (1) 初回利用までの経緯

施設を知ったきっかけは、親族や友人の紹介が77.1%で最も多かった(図6)。大学のホームページやSNSなどネット上で知ったのは7.6%だった。

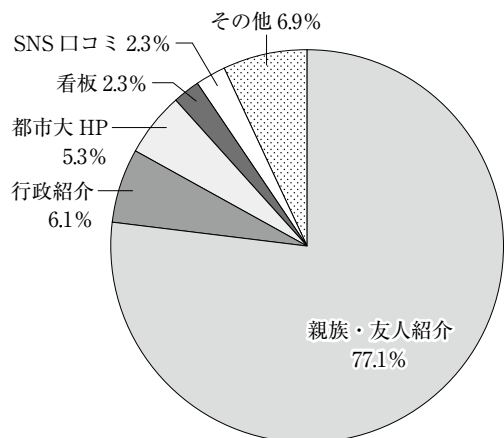


図6 施設を知ったきっかけ

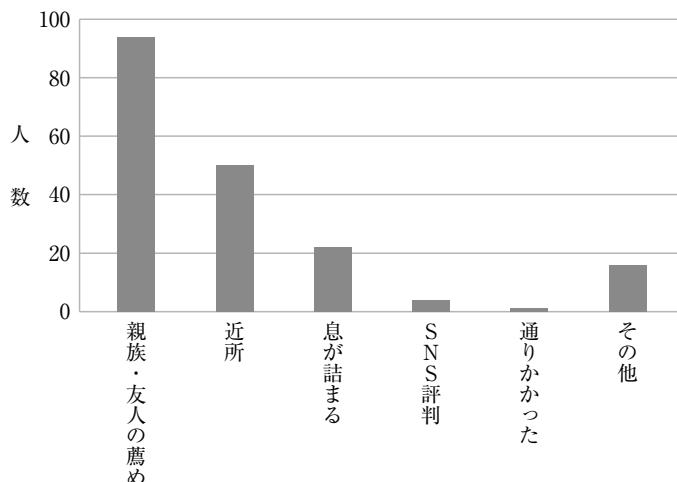


図7 利用の経緯（複数回答）

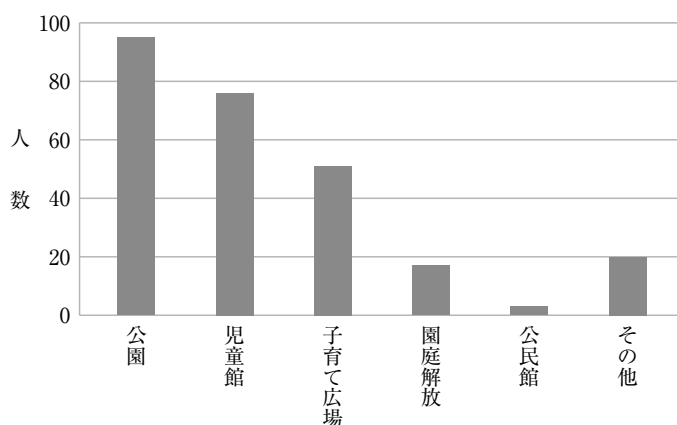


図8 他の利用機関（複数回答）

実際に足を運んでみようと思った経緯は、親族・友人に勧められたから94人（71.8%）、家が近かったから50人（38.2%）の順に多く、家にいると息が詰まるから22人（16.8%）と続いていた（図7）。

## (2) 他の利用機関と他者への紹介

日中子どもと過ごす場としてよく利用する施設は、公園95人（72.5%）、児童館76人（58.0%）、子育て広場51人（38.9%）だった（図8）。

また、本施設を他の人に紹介したかについて

は、友人に紹介94人（71.8%）、家族に紹介28人（21.4%）、紹介したことはない26人（19.8%）で（図9）、利用して良かったと感じる人が多いことがうかがわれる。

誰かに何らかの形で紹介したことがある人の来所回数平均は2.81回で、紹介したことがない人の来所回数平均は1.56回だった。紹介したことの無い人26名中、初回来所者が11名、2回目来所者が13名で、来たばかりのためにまだ紹介したことがないと思われる。

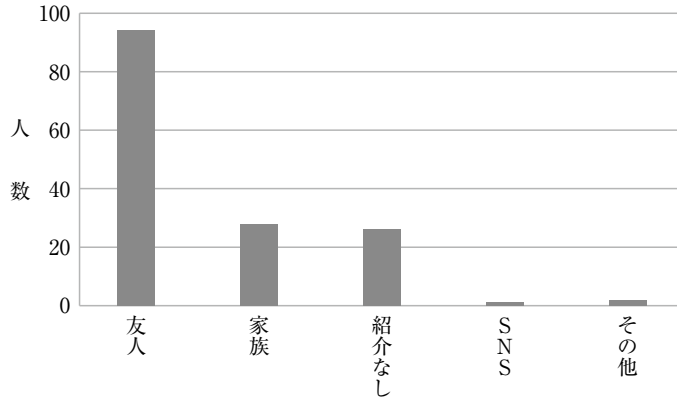


図9 他の人への紹介（複数回答）

#### 4. 利用のしやすさ

##### (1) 利用する一番の理由

図10に施設を利用する一番の理由を示した。子どもを遊ばせられる77.1%、魅力的なおもちゃ13.0%、親の息抜き5.3%の順だった。その他の理由としては、違う年齢の子どもを見ることができる、年齢のちがう兄弟を一緒に連れてこられるなど、異年齢の子どもが同じ場にいることの利点を挙げる人もいた。

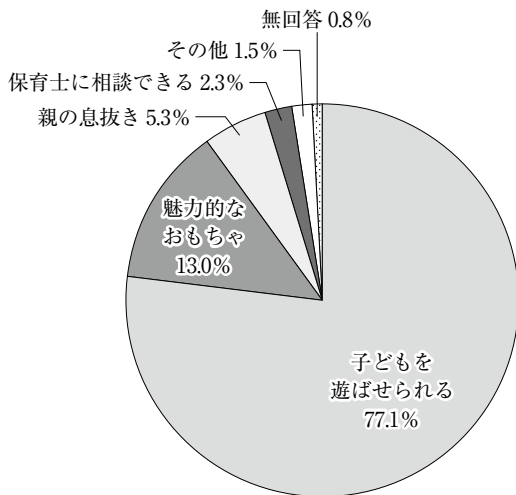


図10 利用する一番の理由

施設をどのような場として利用しているかに

ついの自由記述では、子どもの遊び場として78人(59.5%)で一番多く、次いで親の楽しみや息抜き、情報交換の場として(39人29.8%)、子どもの成長の場(21人16.0%)、親子で過ごせる場(12人9.2%)などであった(図11)。

回答のあった107人のうち2つ以上のカテゴリーにわたる回答をした人が47人で、子どものためと親自身のため、双方の利用理由を挙げる人が多かった。これは、「ぴっぴ」が子どものためだけではなく、親の楽しみや安定のためにも機能していることの表れだと考えられる。

##### (2) 利用しやすい点

施設の利用しやすさについての自由記述をカテゴリーごとに集計したものを図12に示した。131人中118人からの回答が得られたが、玩具や室内遊具に関する記述(56人42.7%)が一番多く、次に室内設備や学内施設に関する記述(52人39.7%)が多かった。

内訳は、玩具の種類が豊富、質が良い、子どもが夢中で遊ぶ、室内に滑り台があるなどだった。設備備品については、自由に使える食事スペース、冷蔵庫、給湯ポット、ティーバッグの提供、学食が使えるなど食事に関する記述が多

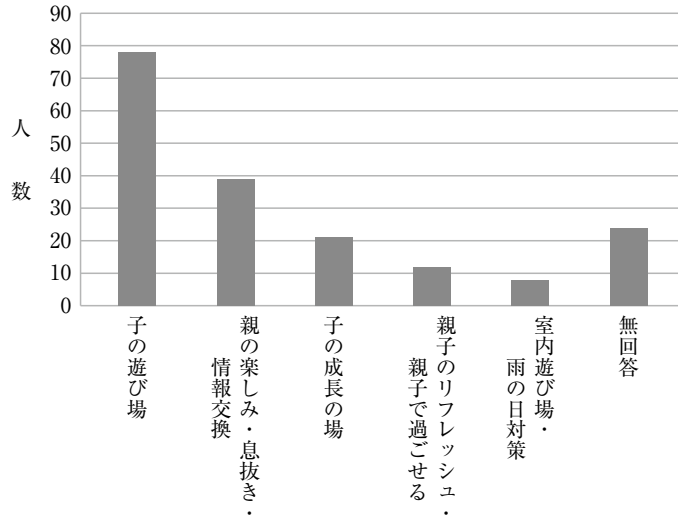


図 11 どのような場として利用しているか (自由記述)

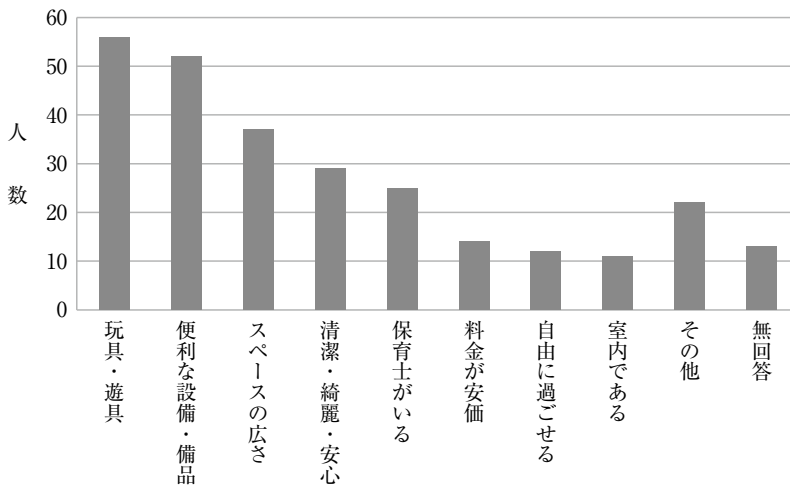


図 12 利用しやすい点 (自由記述)

く、昼寝用のベビーベッド、オムツ替え台、手回り品を入れるポシェットの貸し出しについてもあった。次いで、遊びスペースが広い、清潔で安心安全、のびのび過ごせる、保育士がいて安心、利用料が安価（1日出入り自由で1家族200円）で利用できるなどの記述がみられた。

### (3) 利用しにくい点

利用のしにくさについては、施設設備につい

て（31人23.7%）が一番多かった（図13）。内訳は、電子レンジがない、おもむ替えスペースが少ない、室内にトイレがない、学内設備が利用しにくい、2階までの階段が大変などであった。その他、年齢の低い子どもの保護者からは、年齢の大きい子どもが多いときは安全に不安がある、子どもを見ていない親がいるなど、他の利用者に関わること（16人12.2%）がみられた。



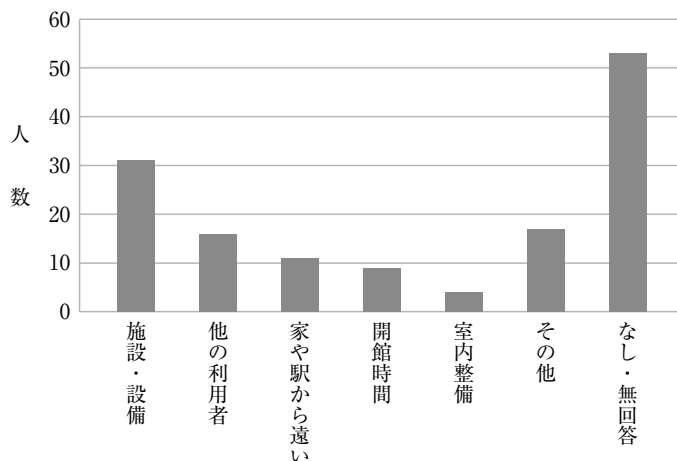


図13 利用しにくい点（自由記述）

日曜日や夏季休暇中の休館、閉館時間が早いなど、閉館時間に関わる記述（9人6.9%）もみられた。

利用しにくい点について記述があった人は131人中78人で、利用しやすい点と比べて少なく、現状で満足という回答もみられた。

#### (4) 保育士の関わり

保育士からの声かけについては、親子のやり取りや利用者同士の自然な会話を大切にするため必要以上に多くなりすぎないように配慮しているが、78.6%がちょうどいいと回答していた（図14）。もっと声かけしてほしいと回答した人は20.6%だったが、声かけしないでほしいという回答はなかった。

利用回数の多い人ほど声かけの程度に満足している人が多く、ちょうどいいと回答したのは、10回以上の利用者40人中37人（92.5%）であった。9回以下の利用回数では、6~9回利用者16人中11人（68.8%）、2回~5回利用者51人中36人（70.6%）、初回利用者22人中18人（81.8%）がちょうどいいと回答していた。

利用頻度では、声かけがちょうどいいと回答したのは、月1回未満利用者が24人中17人

（70.8%）と最も少なく、初回利用者、月1回以上利用者では8割以上だった。

声かけの頻度をちょうど良いと感じる人がよく利用すると同時に、回数を重ねるうちに、程良い声かけの心地よさに気が付くのではないかと考えられる。初回利用者が声かけを少ないと感じないのは、施設の説明のために保育士からの関わりが多いためと考えられる。

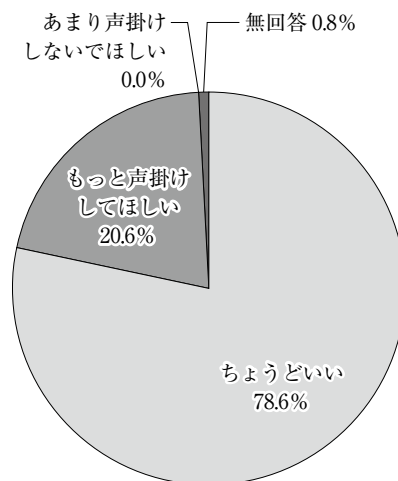


図14 保育士の声かけ頻度

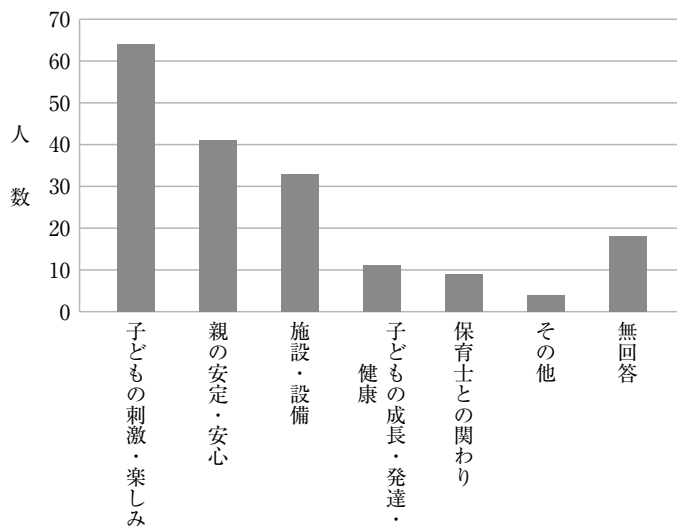


図 15 来てよかったこと（自由記述）

## 5. 利用したことによる変化

### (1) 来てよかったこと

来てよかったことについての自由記述をカテゴリーごとに集計したものを図 15 に示した。子どもの刺激になった、子どもが楽しく過ごせるなどの記述（64 人 48.9%）が一番多く、次は親がホッとできる、気持ちが楽になったなど親の気持ちに関すること（41 人 31.3%）、家にないおもちゃの使用や遊びができるなど設備備品に関すること（33 人 25.2%）などであった。その他、子どもの生活のリズムが整った、よく寝るようになった、保育士と話すことで安心できるなどの回答もみられた。

室内でありながらスペースや玩具が豊かで、家でできない遊びができることや、楽しく遊ぶ子どもの姿を見て親自身が喜びを感じる、親子ともに安定するところに良さを感じる人が多いといえる。

### (2) 自分自身の変化

施設を利用したことによる親自身の心身の変化については、気持ちに余裕ができた、癒しになった（48 人 36.6%）、行き場が増えた（34 人

26.0%）が多く、次いで、親の交友関係が広がった、他の子どもを見ることで親の勉強になった、子どもと過ごす時間が取れた、子どもの成長を実感できたなどがあった（図 16）。

単に子どもの遊び場として機能しているだけではなく、親自身の安定の場や親が子どもと向き合う場となっていることが分かる。

### (3) 施設に望むこと

施設で今後取り組んでもらいたいことについての自由記述では、イベントの開催をしてほしい（49 人 37.4%）が一番多かった（図 17）。イベントの中身は、読み聞かせなど子どもが楽しめるもの、子どもの病気についてなど親の勉強になることなどであった。その他に、預かり保育をしてほしい、保育士や学生に子どもと遊んでほしい、開館時間や期間を増やしてほしい、利用料をなくしてほしい、回数券にしてほしいなどの回答が数件みられた。月齢の小さな子どもの親からは、月齢別の利用時間を設けてほしいという希望もあった。

施設の利用しにくさを回答していた人の 66.7%、回答していなかった人の 35.8%が、何

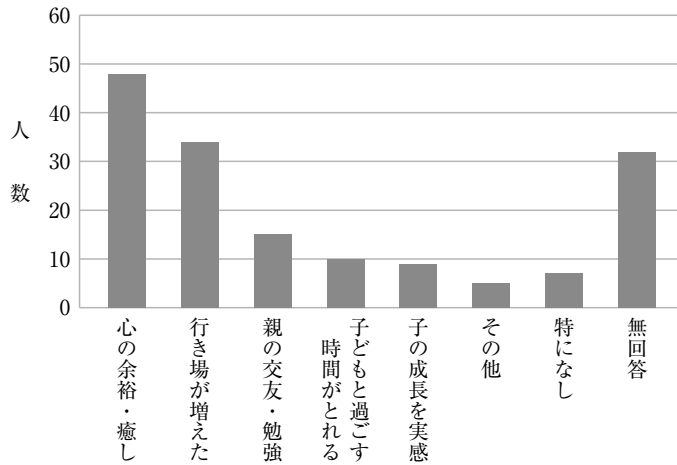


図 16 自分自身の変化（自由記述）

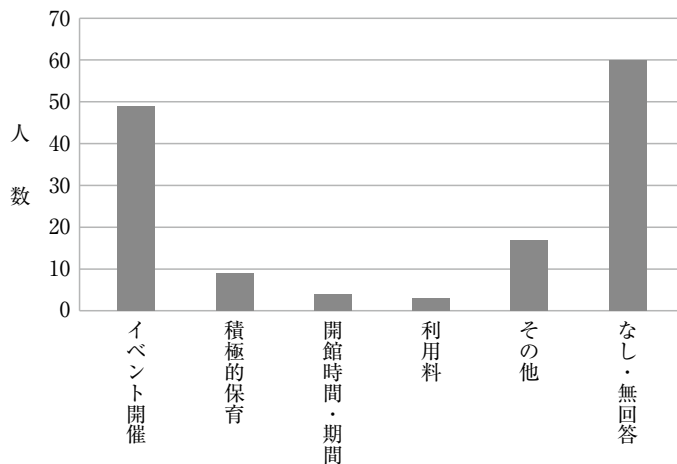


図 17 施設で取り組んでもらいたいこと（自由記述）

らかの希望取り組みを記述しており、利用しにくさを改善するための取り組みと、今以上に来館したくなる取り組みを挙げる場合があった。一方で、今のままで十分なので「びっぴ」自体をずっと続けてほしいなどの回答もあった。

## 6. 育児の悩み

育児の悩みについて図 18 に示した。いつもある 9.9%、時々ある 70.2%で、8 割以上の親

が何らかの育児の悩みを持っている。

悩みや相談したいことの内訳は、多い方から、子どものしつけ、叱り方、イヤイヤ期の対処方法、食事や排泄について、健康や発達について、子どもとの関わり方、遊び方についてなどであった（図 19）。図 17 で挙げたイベント開催希望の中には、卒乳、離乳食、寝かしつけの講座や専門家への相談会などを望む声もあり、相談の場や正しい情報を得る場を求めていることが分かる。また、育児で困ることがある

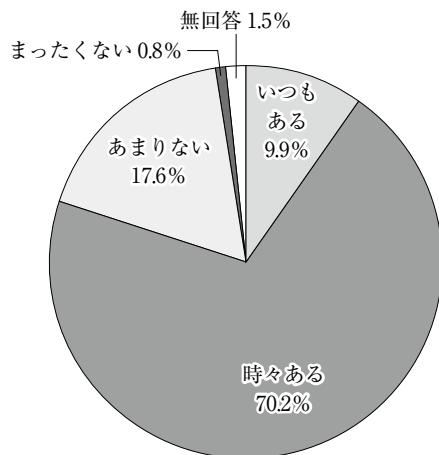


図 18 育児で困ることの有無

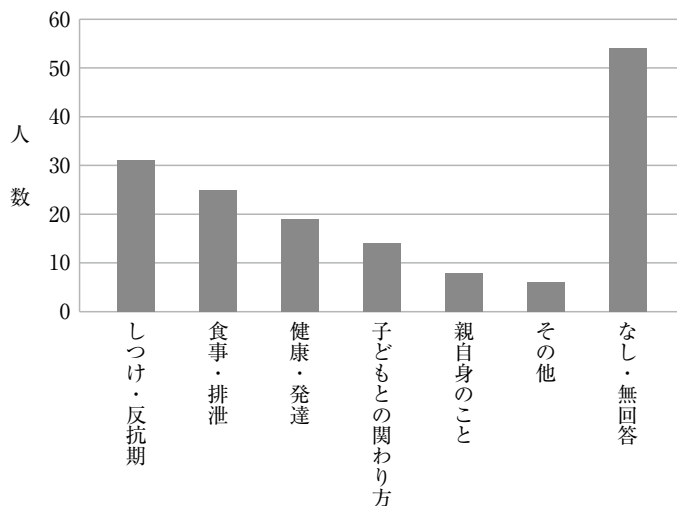


図 19 育児の悩み・相談したいこと（自由記述）

(いつも+時々) 群と、ない(あまり+まったく) 群を比較すると、利用頻度や希望取り組みなどにはあまり違いが見られなかったが、利用する一番の理由に親の息抜きと回答する人が、困ることがある群では6.7%みられ、困ることがない群では1人もいなかった。

#### IV. おわりに

2004年の東京都市大学子育て支援センター「ぴっぴ」の開設から14年目を迎え、初めての利用者意識の調査を実施した。「ぴっぴ」は、ゆっくりとくつろげる場の環境構成、「親子の遊び場」としての利用を支える、利用者の主体的な活動を支える、異年齢で出会い交流することを大切にする、地域社会のネットワークづく

りと再生に寄与する、という基本理念に基づいて設立され、現在もその方針は変えていない。

14年の間には、近隣に同様の施設が増え、その多くは「地域子育て支援拠点事業」の一環として、子育て親子の交流の場の提供や子育て等に関する相談などの他、交流の促進、子育ての援助、情報の提供、月1回以上の講習等を実施している。「びっぴ」では、親子の当たり前の日常を保障するために敢えて積極的介入はせず、場としての居心地の良さを利用者感じてほしいと考え実践してきた。

今回の調査で、「びっぴ」の利用しやすい点として、設備や遊具が魅力的といった物的環境の良さ、保育士とのかかわりの中で親がホッとできるという人的環境の良さを挙げる人が多かった。利用目的としても、子どもの遊び場、親の楽しみや息抜き場としてが多く、環境構成や遊び場としての機能は、理念通りに果たしているといえよう。

利用者の主体的な活動を支えるという点においては、施設利用のしにくさに関する質問で、設備の利便性についての改善点は挙げたものの、デイリープログラムの設定を敢えて行っていないことや保育士からの声掛けをしすぎないことなどについての大きな不満はなく、特段の問題なく受け入れられていると考えられる。保育士からの声掛けについては、利用回数が多い人ほど声掛けの程度に満足している人が多く、必要以上に声掛けをしないことに良さを感じる人がよく利用し、また回数を重ねるうちに、程良い声掛けの心地よさに気が付くのではないかと考えられる。

異年齢が同じ空間で過ごすことについては、他の年齢の子どもを見ることができ、我が子の成長発達を確認できる、勉強になるといった肯定的な意見がある一方で、低年齢の子どもの保

護者からは、大きい子が走り回りそれを保護者が見ていないことがあるので危険を感じることもある、年齢別に時間帯を分けてほしい等の要望もあった。施設内では、基本的には利用者同士の声掛けを推奨しているが、現在でも必要に応じた保育士からの声掛けは行っている。しかし、現実には不安に感じている保護者がいることが分かり、低年齢の子どもの保護者にも安心・安全を感じられる空間を保証するために、保育士からの声掛けや利用者同士の仲介についての方針を検討していく必要があるだろう。

また、利用者の多くが、「びっぴ」を親族や友人など身近な人から紹介され、自身も友人や親族に紹介している。ホームページやSNSの口コミなどネット上で知った人は予想よりも少なく、人と人の直接のつながりから利用者が広がっていることが分かる。利用者の多くが近隣の住人で、一度きりの利用ではなく日常的に立ち寄り、知らない人同士でも会話を交わし情報を交換しあう場として「びっぴ」が機能していることも分かった。

今回は、調査結果の報告にとどまったが、今後は利用者のニーズや子育ての悩み等と関連づけながら、子育て支援センターに求められる支援のありかたについて検討を行っていく。

#### 引用・参考文献

角張慶子・小池由佳 (2013) : 「子育て支援」が親に与える影響について—「親子の居場所」の利用による子育てにおける変化—。人間生活学研究、(4)、41-50。

岸本美紀・小原倫子・小野隆・野田美樹・横田典子・安藤久美子・関谷仁美 (2016) : 他大学の子育て支援センターの見学報告—本学「親と子どもの発達センター」のあり方を検討するために—。岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 地域協働研究、(2)、81-86。

厚生労働省 (2002) : つどいの広場事業の実施について (平成14年4月30日 雇発第0430005号)。

<http://www.ipss.go.jp/publication/j/shiryu/no.13/data/shiryu/syakaifukushi/921.pdf>.

厚生労働省 (2018) : 地域子育て支援拠点事業実施状況 (平成 29 年度実施状況). [https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintou/jidoukateikyoku/kyoten\\_kasho\\_31.pdf](https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11900000-Koyoukintou/jidoukateikyoku/kyoten_kasho_31.pdf).

日下慈・笠原正洋 (2016) 地域子育て支援施策の変遷—支援者の専門性を中心に—. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要、(48)、7-22.

中野菜穂子 (2001) : 児童福祉政策史における保育所の対象と機能の変遷 (その 2). 岡山県立大学短期大学部研究紀要、8、87-96.

日本保育協会 (2010) : 保育所のあり方に関する調査研究報告書—平成 21 年度—. [http://www.nippo.or.jp/research/pdfs/2009\\_06/2009\\_06.pdf](http://www.nippo.or.jp/research/pdfs/2009_06/2009_06.pdf).

日本保育協会 (2010) : みんなで元気に子育て支援—地域における子育て支援に関する調査研究報告書—. [http://www.nippo.or.jp/research/pdfs/2009\\_04/2009\\_04.pdf](http://www.nippo.or.jp/research/pdfs/2009_04/2009_04.pdf).

小川清美・土谷みち子 (2007) : 「あたりまえ」が難しい時代の子育て支援—地域の再生をめざして—. フレーベル館.

小川清美 (2014) : 日常的な学び—「学内子育て支援センターびっぴ」との連携—. 心理学ワールド (66)、23-24.

斎藤裕・小池由佳・角張慶子 (2010) : 地域子育て支援センター利用者における子育てイメージと子育て支援のあり方に関する調査研究. 人間生活学研究、(1)、65-75.

世田谷区子ども・若者部子ども家庭課 (2018) : 平成 30 年度 (2018) 世田谷区おでかけひろば・ほっとステイガイドブック. [http://www.city.setagaya.lg.jp/kurashi/103/128/449/d00155001\\_d/fil/zentai.pdf](http://www.city.setagaya.lg.jp/kurashi/103/128/449/d00155001_d/fil/zentai.pdf).

東京都福祉保健局 (2017) : 平成 29 年度子育てひろば事業実施施設一覧表. [http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kodomo/kosodate/ouen\\_navi/hiroba.files/H29hirobaichiran.pdf](http://www.fukushihoken.metro.tokyo.jp/kodomo/kosodate/ouen_navi/hiroba.files/H29hirobaichiran.pdf).

東京都市大学人間科学部 (2014) : 子育て支援センター「びっぴ」10 年のあゆみ. ライト社.

矢萩恭子 (2013) : 2 歳児保育室「あそびば『ほこあ』」における成果と課題—保育実践力養成と子育て支援の相互機能の側面から—. 田園調布学園大学紀要、(8)、79-102.

山森泉・熊田凡子 (2017) : 大学における子育て支援

の取り組み (2) —赤ちゃん・サロン」2 年目の報告—. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要、(9)、71-82.

安川由貴子 (2014) : 地域子育て支援拠点事業の役割と課題—保育所・保育士の役割との関連から—. 東北女子大学・東北女子短期大学紀要、(53)、79-88.

## 謝辞

調査にご協力くださいました「びっぴ」利用者の皆様、利用者への依頼にご尽力いただきました保育士の皆様に厚く御礼申し上げます。

本研究は、東京都市大学総合研究所子ども家庭福祉研究センターの研究の一環として行った。